

「学徒動員」の思い出

太宰府市 中村 法明

私は大正15年2月、朝鮮の慶尚北道道庁所在地である大邱府（現在、テグ直轄市）で生をうけ、昭和18年3月中学校を卒業するまですごした。大邱は盆地なので夏は暑く冬は寒い風土であるが、リンゴの産地として有名である。戦時色濃い時代の学園生活であったが、よき師、よき友に恵まれてそれなりに青春時代を謳歌したものである。ぬけるような青い空、甘いかおりが匂うアカシアの白い花、緑にキラキラ光るポプラの樹々の大邱の風景は遠い昔の思い出となったが、生をうけ多感な青春時代をすごした大邱は私の心の故郷であると言っても過言ではない。

昭和18年4月、京城高等商業学校に進学したのだが、昭和19年に入ると戦局は段々と不利になってきて、落ち着いて勉強する状況ではなくなってきた。そして昭和19年7月、遂に学徒動員令が下ったのである。我々は学業なかばでペンを捨て、祖国の勝利の礎たらんとの意気高く学舎を後にして、勇躍平壤（ピョンヤン）の陸軍航空廠へと向かった。未曾有の国難の時にあたり、全員が国の大義に殉ずる覚悟であった。

延禧専門学校の諸君達とともに隊伍を組み、歩調をとって航空廠の正門をくぐった。玄関前の広場で入所式が行われ、各人の配属部署が発表になったのだが、私の配属先は何と倉庫係であった。工場現場で旋盤、フライス盤、ボール盤などに取り組み、航空機の修理作業に情熱を打ち込む決意に燃えていたのに、倉庫係とは誠に心外であったが、これも軍命令とあれば致し方ないことであり、諦めざるをえない。没有了法子。

航空廠に入所した日の夕食は赤飯が出た。陸軍当局のはからいに感謝して箸をとったのだが、びっくり仰天。小豆の代わりに稗が入っている。稗の赤飯というものを初めて味わったわけだが、この赤飯は以後しばしば食膳に上った。

倉庫係の仕事は部品の受け入れ、払い出し、そして棚に保管されている数多くの部品と材料カード（棚卸票）を照合する仕事で、他の学友達が3交替勤務で油にまみれて作業しているのに較べて変化のない単調な作業の明け暮れであり、退屈至極髀肉の嘆をかこっていた。昼休みには軍属達と相撲をとり、柔道初段の実力を発揮して投げとばしたりして憂さをはらしたのを思い出す。

倉庫の責任者は藤野少尉であった。富山県の高岡高等工業学校（？）を卒業されて間のない若い童顔の技術将校で、小柄な身体ながら勢いよく大股で歩いておられた。気さくな性格のうえ、年齢もあまり差もないせいか親近感もあり、いろいろ有益な話を拝聴する機会があった。勤務中に退屈の故か、ついウトウト、あるいは虱（シラミ）退治に熱中している時、少尉殿の突然の巡回にぶつかってビクツとした時もあったが、何も言われず恐縮したものだ。時折、将校官舎に招待されて遅くまでお邪魔したこともあった。また、日曜日には一緒に大同江を渡っ

て平壤市街まで出掛けて、将校食堂でご馳走になったことも忘れられないひとこまである。物資不足の折にもかかわらず、将校食堂のメニューには肉料理や魚料理や酒類がふんだんにあって、その多様さに驚いたものである。

動員生活の食事は不味く、栄養も十分に摂れない。そこで藤野少尉の指示によって買い出しの使役に出ることになった。倉庫には出勤せず、毎日トラックの荷台に乗って肉や魚や野菜などの買い出しに出るのだが、時には牛乳や甘栗なども入手することができて学友達からも喜ばれ、面目を施したものである。トラックには航空廠の食料も積み込むので韓国人の軍属達も数人同乗していたが、彼等ともすぐ友達になって雑談するようになった。こうした韓国人とのひびきを交えてのつきあいは、私のその後の人生に大いに役立ったと思っている。

前述したように、昭和19年7月から平壤陸軍航空廠での動員生活に入ったのだが、入廠後1ヶ月位経つと体がかゆくて仕方がない。私だけでなく他の学友達も同様である。誰かがかゆいのは虱の故だと言い出した。そこで念のため下着を脱いでよく見れば、縫い目のところにニクキ虱がいるわいるわ。ピッシリと整列しているではないか！虱は御承知のように発疹チフス等の病原体を媒介する悪党である。これは一大事！早速引率の先生にお願いして軍当局と折衝して戴いた結果、熱湯にて各自の下着を煮沸して退治することになり、やっと一件落ち着いたのだが、学友の中には虱とは一身同体だから愛着があり殺すのは忍びないとガラス瓶に虱を入れて飼って(?)いた奇人もいた。以後時々下着の煮沸消毒が行われたので虱騒動は鎮静したが、とんだ人騒がせな虱メであった。

また、日曜日は作業が休みなので、平壤市街に出て軍属の家に押掛けたり映画を観たりして英気を養った。知人の家で御馳走になってつい羽根をのばしすぎ、門限に遅れ大目玉をくったこともあるが、これも今回顧すれば懐かしい思い出の一つである。

平壤陸軍航空廠での動員生活の思い出は、生来の楽天的な性格の故かあまりつらかったことは記憶にない。酷暑の夏、厳寒の冬を無事乗り切り、新緑の芽が萌え出ずる昭和20年4月、動員解除になって現在のソウルの学舎に戻ったのであるが、その際公私ともお世話になった藤野少尉に挨拶にうかがった。しかし残念ながら少尉は所用のため不在であり、後髪を引かれる思いで航空廠を後にした。爾後50年の歳月が流れたが、お礼の言葉を申しあげないまま今日に至っている。それが未だに心残りである。